埼玉協同病院だより　●私たちの医療理念● ～人権をまもり、健康なくらしに役立つ医療を、地域とともにつくります～　発行：埼玉協同病院

季刊 ふれあい 冬号

2015年12月
No.04

〒333-0831　川口市木曽呂1317
Tel.048-296-4771　Fax.048-296-7182
ホームページ：http://www.kyoudou-hp.com

特集 協同病院の

HPHとはなにか

病院・地域で健康を科学するHPH
～日本で初認定プロジェクト～

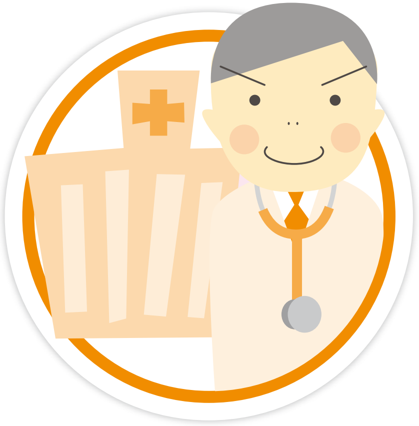
無料体験 受講生 募集中

ココロンエクササイズ ～燃やせ体脂肪教室～

1月9日(土)からスタート

40～60代の方を中心に体脂肪を燃焼しやすいからだ作りを目指すプログラムです。

医療生協さいたま　**埼玉協同病院 組合員活動課**　TEL：048-296-8180



協同病院の

HPH

病院・地域で健康を科学するHPH

HPH (Health promoting hospitals & Health Services＝ヘルスプロモーションホスピタル＝ 健康増進活動拠点病院) は、WHOの宣言に基づき、1991年欧州で開始されました。現在世界42カ国900施設、日本では38施設が加盟しています。
埼玉協同病院は、2013年10月HPH国際ネットワークに加盟しました。HPH登録の意義と、実践を責任者の福庭副院長と稲村看護副部長にうかがいました。

地域みんなで健康のまちづくり

「まだまだですが、もう少し地域の開業医の先生や福祉の団体などと一緒に取り組みたいと思っているんです。WHOの世界禁煙デーの取り組みで川口市の後援とともに、今年は保健センターからの参加もいただきました」。

そして「『さすが生協さん。組合員さんの協力あっての取り組みですね。これからもいろいろと協力させてもらいます』との言葉も頂いた」と笑顔で話すHPH推進センター責任者の福庭副院長。

「医療生協だけにとどめないで、もっと周りの地域とか、ちょっと大きく言えば世界への発信が究極の目標です」

その言葉どおりスペインのバルセロナ、その翌年がノルウェーのオスロで開催された学会や国際HPHカンファレンスでは、3年間ずっと続けて発表しています。

「地域の組合員に報告に行くと、医療生協の運動が世界の中で注目されていることや、これから何をするのかなど、経験したことがないほどの質問や意見を頂いています」と組合員さんたちのHPHへの関心の高さに驚く稲村看護副部長。

保健・医療・介護、地域まるごと健康づくり・明るいまちづくり運動などを、住民である組合員と職員が一体となってすすめるヘルスプロモーション活動は世界に類がありません。

医療生協さいたまのヘルスプロモーション活動のエビデンス(証拠・根拠)を発信し、法人としての社会的使命と社会貢献を果たせると考えています。

なぜ今HPHに取り組むのか

医療生協さいたまの事業を利用している患者、利用者、組合員の治療に、ヘルスプロモーションの概念を活かすことで、短期的な健康レベルの向上と、長期的な健康生活の向上を促進させることができると考えました。また、HPHネットワークの専門家の研究から導き出された「5つの健康の決定要因（運動不足、栄養不良、肥満、喫煙、健康を害する飲酒)」の視点から支援内容を評価し実践することで、患者・利用者のQOL向上に役立てることができます。さらに、近年の研究で、WHOの「健康の社会的決定要因」が、人々の健康や暮らしに、複雑にからみあい、疾病や健康格差につながっていることが、明らかになってきました。HPHに登録して取り組むことは、私達の法人の基本理念「人が人として大切にされる社会をめざす」ことの実践であり、組合員と職員が協同してすすめていく「地域まるごと健康づくり・明るいまちづくり」の質的向上につながると考えました。

埼玉協同病院の取り組み

医療生協の「運動教室」では70歳以上の女性の参加者の筋力が日本の平均と比べ高くなっています。「脳いきいき教室」でも動物の名前をどれだけ言えるかというCFTという指標と、意欲や健康感などを問診するDPIという2つの認知予防の指標を比較し、どちらも改善しました。

高齢者の死因第1位の肺炎では、誤嚥や口腔内の清潔の問題で以前から口腔ケアに取り組み、HPHでも継続しています。医療生協の歯科診療所から歯科衛生士2人が病院に異動し、看護師やスタッフと一緒に口腔ケアを徹底しています。

職員の健康問題として取り組んだアンケートの結果、看護師と看護助手の3分の1が腰痛を持っており、理学療法士が腰痛予防体操を考案。肩こりが取れたり、腰が軽くなったなどの経験から業務開始時に取り組むことが定着しています。患者さんのベッドからの移乗介助時の負担軽減にも取り組んでいます。朝食抜きで仕事している11%の職員には、安価でバランスの良い朝食の提供を始め5.5%に減りました。10%いる職員の喫煙を減らす取り組みも強化しています。

日本で初めての試み

「1職場1HPH。組合員さんや職員の健康のために、とにかく何か1つやろうと1年間取り組みました」。推進センターでは取り組みの進め方にも気を配りました。

取り組み交流会で、よりイメージをもってもらい、その翌年には、HPHが提起する「地域」「患者・家族」「職員」を対象に「1職場3HPH」に取り組むことを提起。今、各部門で頑張っています。

埼玉協同病院は、国際HPHの健康プログラムを効果・研究・実証する認定プロジェクトに日本で初めて参加しました。世界で47病院、日本では2つの病院しか取り組んでいません。

こうした取り組みを、福庭副院長は各地で話しをしています。全国では民医連以外へも関心は広がっています。

最後に福庭副院長は「組合員さんに取り組みを広げてもらい、医療者はちゃんとデータを出す。これまでの埼玉協同病院のように組合員と病院が一体に取り組めば社会や地域が変わっていく」と自信を見せます。

HPHって？

医療機関が、医療の質と地域や環境を改善し、患者と家族、スタッフの満足度を向上させることを目的としたものです。

HPHに登録した病院は、組織の構造(設備・機器・専門職員等)、文化、意思決定とプロセス(提供される内容) を改善し向上させることで、病院とヘルスサービスに関わる人たちの健康状態の改善を目指す組織と理解されます。

HPHが働きかける対象は、患者と家族(特に弱い立場の人々の要求に取り組む)、病院スタッフ、地域住民と社会環境です。

民医連

「生活と労働の視点」や「いのちの平等」を掲げ全国47都道府県の事業所に8万人を越える職員が働く医療団体。埼玉協同病院も加盟する。

稲村 まゆみ 看護副部長　　福庭 勲 副院長

自分のために　みんなのために

楽しく健康 HPH

エイチ　ピー　エイチ

禁煙外来

保健師　木村 美穂

喫煙は習慣や嗜好ではなく、ニコチン依存症という病気で保険適用となっています。協同病院ではニコチンパッチを使用し、貼り薬のサイズを徐々に小さいものへ切り替えて禁煙を行っていきます

専門外来、健康増進センターや麻酔科外来、うぶ声学級などでは「禁煙のすすめ」や「禁煙外来の紹介パンフレット」の配布、ニュースの掲示や術前の禁煙のアドバイス、胎児に与える影響の話などに取り組んでいます。

今後は、医療生協の班会や、健診事業所、学校など地域に向けて禁煙の輪を広げて行きたいと考えています。

協同病院では禁煙外来（毎週火曜日午後完全予約制）を行っています。たばこの害についての学習や事業所での禁煙支援の相談にも応じています。お気軽にお電話でご相談ください。

運動教室

安行支部

インシュリン注射を打たなくても良いほど数値が改善したという人もいる健康教室。毎回20人以上の組合員さんが楽しく体を動かしています。無料の太極拳教室も実施しています。この日は健康チェックの後、体力測定では握力・長座体前屈・開眼片足立ち・5メートル歩行・30秒椅子立ち上がりが行われました。特に片足立ちや椅子の立ち上がりなどはゲーム感覚で大勢でやるとちょっとした運動会気分です。

「励ましてもらうことで継けることができます」と参加者から。個人データの蓄積で「1年間の目標ができます」と真剣な表情で成果をチェックしていました。そして目指すのは「ずっと病院にかからない健康づくり」です。

食生活

調理師主任　高橋　聡

食養科ではHPHの取り組みとして、レストラン「虹の森」で職員向けの朝食の提供を始めました。利用者を増やすために要望を聞き、テイクアウトできるおにぎりやスムージーなど改善もしています。また、新人職員を対象に冷蔵庫の残りものを想定した一人暮らしに役立つ料理教室も行いました。

地域の班会で行う料理教室とは違い、包丁を握ったことのない職員もいるので本当に簡単な料理から始めています。ホウレン草をゆでることで、おひたしに胡麻和え、ナムルなどの惣菜ができることを伝えました。想像以上に料理をしない人が多く、料理に興味を持ってもらうために今後はレトルト食品を使ったアレンジメニューなども提案していきたいです。

もちろん、入院患者様にも病棟イベントでの行事食や、産後のお祝い膳、緩和ケア病棟でのワゴンサービスなど、入院生活に彩りを添えています。また、アレルギーなどには調理師が直接出向いてお話を伺うこともあります。

大学と共同した

ココロンエクササイズ

「40代から60代の人が楽しく取り組める健康体操がほしい」「スポーツジムでのエアロビのように、体脂肪を燃やす運動を、みんなでやりたいと思っていた」と話すのは発起人の一人である磯崎さん。従来の運動教室よりもハードで、楽しいだけじゃない血圧と体脂肪を正常値に保つ効果的なエクササイズです。

現在は月２回、健康体操を広げられる組合員のインストラクター養成を進めています。今後は、ふれあい会館を中心に週１回のペースで体操教室を開く予定です。皆さんも一緒に汗を流しませんか？

発起人 磯崎 悦子 さん

運動が苦手な人も自分ペースで

理学療法士
田代 友之

川口市内48カ所の健康広場のデータ分析との比較で、70代の体力が60代を上回りました。70代には筋肉の蓄積があり、若い世代は時間がなくて筋力アップができていないようです。運動が苦手な人でも、自分のペースで徐々にハードにしていけるので安心です。今どの筋肉を動かしているのかなど運動が健康に結びついていることを実感できるのも特徴です。

命の授業

「自分も他人も大切に」～深谷第一高等学校～

C3産婦人科・小児科　祐川 志帆
髙田 綾野

助産師として伝えたいこと

1年生320名の思春期の世代を前にして私が考えていたのは、「大人の心と体になるとはどういうことなのか」を知り、「新しい命を作り出す責任がある」ことを自分達で考えてほしいということでした。そして、「生や性」のこと考えることを恥ずかしいものと思ってほしくないということです。

数多くの命の誕生の場面に立ち会い、たくさんの喜びや、生命の神秘、様々な悲しみに出会い、日々命について考えさせられている助産師にこそ伝えられる命の教育があるはずとの思いから「生と性」の教育に取り組んでいます。

「命がけの苦しさを乗り越えて生まれてきたこと」「今生きている尊さ」「すべての命を大切にする気持ち」を感じ、どうあるべきかを考え、行動してくれるきっかけとなることを願い授業を行いました。

氾濫する情報に惑わされない知識を

目にしたくなくてもインターネットの広告などから性に関する情報は入ってきます。正しい知識を教えられていないと、性をいやらしい、汚(けが)らわしいとゆがんだ認識で、大人に相談できずに間違った性行動につながることが多くなると言われています。

正しい情報から、性を正しく知り、やがて新しい命を生み出す可能性を自覚し、自分の性も他人の性も大切にし、責任ある行動がとれる大人に育って欲しいと願っています。

助産師として伝えられることはごくわずかです。親御さんが伝えるものの大きさにかなうはずはありません。今回の授業をきっかけに、家族の中でお子さんが生まれた時のこと、こんな風に育ってきたんだということを親御さん自身で伝えることから始めてみていただきたいと、親御さんにも授業の内容のお便りをお渡ししました。きっとお子さんたちは自分の家族から伝わる愛を感じ、自信を持って生きていく力を得られるのではないかと思います。

この紙面をお読みの皆さんもお子さんと向き合ってみてください。

私たちは、今後も微力ながら皆様のお力になれたらと思っています。

左から、小堀熊谷生協病院長、祐川助産師、髙田助産師

歯科衛生士のいる病棟

歯科衛生士
佐藤 美由紀

病院勤務で驚いたことは、寝たきりでない患者様にも口腔ケアのニーズがあることでした。口の中を清潔を保つことで食欲が増し、認知症や心臓病、糖尿病の予防にもつながるというデータもあります。唾液の分泌が促され発熱や誤嚥性肺炎のリスクが下がるとも言われています。

歯科衛生士でなければ対応できない患者様は全体の1割弱ですから、すべての患者様に対応するために、看護師さんや言語聴覚士さんにも専門的な知識や技術を伝えています。

以前にも歯科診療所から病棟訪問をしていましたが、病棟配属になって看護師さんから相談を受けたり、やり方を見学されたりすることは格段に増えました。

私自身も歯科診療所では治療だけで良くなればOKでしたが、今は全身の健康改善につながっているかどうかを強く意識するようになりました。

一般病棟から回復期病棟に移り食事をされている患者さんの姿で、口の健康が全身に直結していることが実感できて嬉しくなります。

恒例「駅前相談会」深刻な相談もあり、追跡が必要

10月26日、少し寒い中でしたが東浦和駅前で、帰宅途中の皆さんに「健康でお困りのことはありませんか」と呼びかける院長を先頭に29名の職員が参加して毎年恒例の「駅前健康相談」を行いました。医師・看護師・事務などがペアになって相談を受けました。会社員の方がもっとも多く、介護関係や保育士、教員の方などもおられました。

「昼間寝てしまい上司から叱責される」「動悸・めまいがする」「意識消失することがある」「職場、教員同士の関係でストレス」「乳房が大きくなっている？乳がんか気になる」「肛門から出血した」「昔、突発性難聴の疑いと言われ、呼びかけに気づかない」など深刻な相談が多くありました。一方で「健診を受けたことがない」「ワンコインで血糖値が測れるの？」などの声も聞かれました。

参加した職員からは、「定期的に開催したほうがよい」「相談を受けたままにせず、はがきを渡すなど追跡できる仕組みが必要」「健康を維持する広報を行う」「健診の大切さをアピールする」などの改善意見が出されていました。

専門医シリーズ 4 SERIES

和泉 桂子
医師

30年変わらぬ思い 専門は 子育てサポーター

若い医師時代からお母さん的ベテラン医師になった現在まで、多くの母子を診て来た和泉医師。患者の立場に立った医療の実践がHPHの実践と重なっていることを語ってもらいました。

1977年東京女子医大卒業
東京逓信病院でレジデント
1979年埼玉協同病院入職
小児科診療部長　日本小児科学会専門医

「子育てサポート医」

和泉医師が育った長野県の岡谷市は女工さんが多く、昔から保育所があり、母親は在宅で仕事をしていて保育所に通っていました。体が弱く抗生物質もない時代で何度も入院し、看護師さんと仲良くなって、その頃から小児科医になることしか頭の中になかったと言います。

協同病院で小児科をやる時には専門というより「子育てサポーター的な感じでやりたいという思いで始めました。それから30年、今も変わっていない」と言います。

その思いを強くしたのは自身の子育ての時期にありました。同じ医師である夫が博士号を取る時に業績を出している横で子どものためにオッパイを飲ませながら「この差は一体何なんだ」と悶々としていた時に「子育てを基本にした小児科医がいてもいいじゃないか」と考えることができました。

そこから『子育てサポート医』としての仕事に取り組みます。食物アレルギーでは子どもの食生活はもちろん、家族の嗜好も含めて食生活の指導をしなければ改善しないと栄養士さんにも入ってもらい、離乳食の作り方や食べさせ方を指導したり、病棟に保育士さんに入ってもらい入院中に生活リズムの指導をしてきました。

うぶ声学校、離乳食教室、多職種が指導する乳児健診など様々な仕掛けをつくり、お母さん達が自主運営する「わいわい子育てサークル」にもつながりました。

全ての活動がヘルスプロモーション

スウェーデンでの3年間の子育ても後押ししました。息子さんが通ったモンテッソーリで、家庭と同じキッチンで野菜料理をしたりしたのは「キッズ インザ キッチン」というヘルスプロモーションの政策だと後に知りました。ゴミの出し方も子どもの頃から学ばせていましたが、喘息も肥満も子どもの時にきちんとやらなければ、なかなか治らないのと同じだと思いました。

和泉医師は「子どもの立場に立って発言する（アドボカシー）という小児科の立ち位置からすれば全ての活動はヘルスプロモーションになる」と考えています。「子どもが幸せに健康で育つ」ことをすべての前提として取り組んできたことから、ただ親切に患者のためにとやってきたことが実は理論化すればヘルスプロモーションだったとHPHを捉えています。

HPHをどのレベルで、どこまで徹底するかは病院次第。出産前から乳児期まで一貫して、かつ医師・看護師・助産師・栄養士が一丸となって生活から治療まで支援するシステムは、まさに協同病院の医療・保健・予防の柱です。

続く信頼

大人の健診は病気を見つけることにあります。対して子どもの場合は病気も診ながらきちんと発達しているかをチェックすることが大切なポイントです。そして発達のチェックと同じくらいに子育て支援もしようと10年ほど前から保健学会でも奨励するようになりました。育つ環境もチェックし支援する。協同病院では古くからやっていたことです。

近年は妊娠中から様々な悩みを抱えている親が増えています。仕事や家族のこと、シングルマザーで家計が厳しいという人も珍しくありません。問題がありそうな家庭には助産師が訪問したり保健所のような機能を担うこともあります。親の生活を理解することが、子育てサポートの小児科としてまず求められることだからです。

アレルギー外来では1歳までに多種の魚を食べてと言います。お母さんの食事も書いてもらうと、鮭の一切れを二人で食べている母子がいます。ほとんど子どもが食べてしまうでしょうから「お母さんは食べてるの」と聞くと「実はお金がないから魚は一切れしか買えない」と。「お魚よりお肉の方が安いけど、まずお魚を食べてからお肉をと言われているから」、とそれをちゃんと守っている。けれど「お金が無い」と言われるとそれ以上になかなか踏み込めない時もあります。

「孫を診る」時はやさしくなる

「若い医師時代には、自らも子育て中で母親たちの苦労や悩みもよく分かり、共感もするし仲間意識もあり、よく叱っていたんだと思います。昔子どもを連れて受診していた何人もの母親たちからは『よく叱られた』と言われます。けれど私自身にはあまり『叱った』という記憶はありません。その子どもたちが親になって子どもを連れてきます。すでに孫にあたる子どもの母親たちには随分優しく接することができます」と和泉医師。当時の親たちもちゃんと老後の親を連れて病院に来てくれる。小児科医としての役割はこういうところにもあるのだろうと最近は思っています。

患者の立場に立った医療はヘルスプロモーションにつながっています。

薬を出すだけが仕事じゃない

小児科医長　平澤　薫

和泉先生に教わった、鼻水を上手くかめる指導や離乳食の指導は協同病院では当たり前ですが「病気を診るだけ」のところでは必要とされません。薬が欲しいお母さんたちにも、大事なのは薬じゃなくてケアだと話します。食事や生活習慣は大人になってからの健康にも影響を与えるため、小児科はお母さんの子育てを支援し問題を共有することを大事にしています。厚労省のガイドラインにも協同病院がやってきたことが言葉までそっくりに書いてあります。

子育てが心配なお母さんが、子どもとともに育っていくのは勇気付けられ、大きなやりがいになります。

患者&ナース対談

自分で健康管理することを教わりました。（袴田）

左　袴田 光春さん（神根地区連合町会会長）
右　見川 葉子さん（看護部長）

自分でする健康管理。

袴田　1985年8月12日、日航機の墜落事故の日に新築の建前作業中に高所から転落し、「腰椎圧迫骨折」で入院。コルセットで寝返りもできず、独立したばかりの33歳で、2番目の娘はまだ1歳でした。病室で見積もりや従業員への指示をしたりしました。

看護師　ちゃんと療養は出来ましたか？

袴田　動けるようになって、看護師さんに「体温・血圧も自分で測って記録するのは大事ですよ」と言われ、測り方を教わり記録すると、上下の血圧の感じや血管の波動も自分で感じられ、この時自分で健康管理することを学びました。腰以外は健康で、することが無く暇でしたからできたんでしょうね。

看護師　今もされているんですか？

袴田　退院してからもしばらく続けましたよ(笑)。当時体重は太り気味で、気になったのか(笑)栄養士さんが「体重減らしてみますか」って。退院時には7kgほど減量しました。

木遣りのために※1

看護師　禁煙も成功されたとか？

袴田　15歳で宮城から上京して煙草は一日60本。入院中に隠れて吸うのが嫌で禁煙し、45歳の時に“つい”8年間吸ってしまい、ニコチン依存症を実感しました。私は、新春の木遣りを披露するのが恒例です。ある年に声が響かなくなって、集まった方々に申し訳ないと思って再びやめる決意をしました。

夫婦仲良くお世話になって

看護師　入院した当時の看護師とか覚えてますか？

袴田　当時は、上嶋さん(退職)や堀井和子さん（現在も協同病院）が勤務され、堀井さんとは娘が同じ町会の同級生でよく遊びに来ていました。入院した当初、環境が変わり、仕事が気になって眠れないと愚痴っていたのが、慣れるとよく寝ていたので妻は笑っていました。その2年後に妻が2階のベランダから柱を伝って※2降りようとして転落し、協同病院3例目の「腰椎圧迫骨折」入院でした(笑)。環境が変わり眠れない妻も3日目には熟睡していました(笑)。

看護師　ご夫婦仲がよすぎますね。

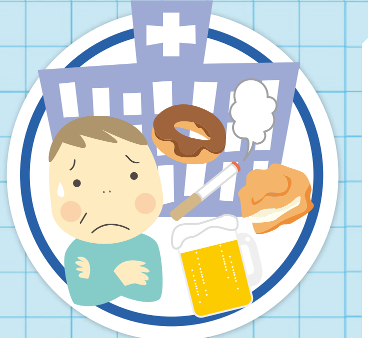
袴田　協同病院で3人出産した長女の娘が、今年運動会の練習の組体操で転落(えっ、また?!(笑))。手首骨折でしたが手術をすることなくギプスで治していただきました。次女も心臓が悪く、協同病院の紹介で東大病院で治療を受けています。

病院への期待

看護師　病院への要望などあれば？

袴田　ここで話すことでもないんですが、連合町会は高齢化や未加入世帯で、小学生がいない自治会もあります。高齢者の見守りも行政の世帯閲覧ができなかったり、軒先の黄色いハンカチも悪徳業者に知られるなどで困難になっています。医療生協が地域包括支援センターの連携会議などに参加いただければ心強いですね。

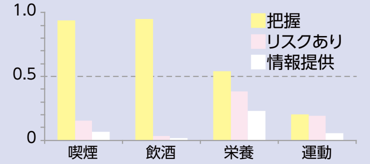
※1　木遣り（やり）：労働歌の一つ。1202年(建仁2年)に栄西上人が重いものを引き揚げる時に掛けさせた声が起こりだとされる。時代の流れにより歌へ変化し、江戸鳶がだんだん数を増やし江戸風を広めていった。
※2　柱を伝ったのは2～3歳の子どもが内側から鍵をかけてしまったからでした。



ご存じですか？

問診とその後

生活背景から対応が見えてくる



全患者に対して健康リスクの情報を記載しリスクのある方には情報提供やアドバイスを行い、その記録の割合を測定しています。

近年、喫煙、過度の飲酒、栄養過剰、栄養不足、運動不足、お口の不衛生などの生活習慣の影響による入院が増えています。これは、HPH欧州事務局でも注視されています。

埼玉協同病院では、入院や外来通院時に、喫煙の有無、飲酒量、身長と体重の測定、運動習慣、歯科検診・受診の有無などの、生活習慣をお聞きし、生活背景を知ることで、入院や外来受診後、自宅での病気の予防につながる情報提供や説明を行っています。

生活習慣の改善をめざして

リストラや労働条件による家計の悪化、職場の人間関係、幼少期からの生活環境など、現在の病気の悪化は必ずしも自己責任でないこともあります。

お仕事や家庭の環境、病状などから生活習慣の改善ができにくい方にも考慮しながら生活環境を整えるための継続的な支援を行なっています。

事　例

Aさんの場合

喘息発作で1～2ヶ月おきに入退院を繰り返していたAさん。入院時に、生活環境の中に喘息の誘発につながるものはないかをお聞きし、そうした要因に注意を促すとともに、発作が起きにくい身体作りを中心にすすめ、呼吸の筋肉を鍛えるリハビリにつなげました。Aさんは自宅でも呼吸のリハビリを続け、何ヶ月も入院せずに過ごされています。

Bさんの場合

Bさんは、がんの診断で化学療法のために入院されました。小さいお子さんとの母子家庭で、治療の合間に働けるか悩んでおられました。仕事の内容や就労規則をお聞きし、自治体の助成制度を確認。主治医とも、それらの条件を元に見通しを話し合いました。退院後も職場の上司との復職ルールの確認など、外来支援を続け復職の希望が見えてきました。

医療生協さいたまキャラクター　ココロ星にくらすココロン

個人情報を厳守して支援を行なっていますので、他へ影響することはありません。治療だけでなく、予防や生活再建も見通した支援をめざしています。お気軽にお電話ください。Tel.048-296-4771

増田院長の今日もニコニコ VOL.04

院長
増田 剛

医療生協としてのヘルスプロモーション

今回はヘルスプロモーションを取り上げました。直訳すれば健康増進や健康づくりとなりますが、元々はWHO（世界保健機構）が1986年のオタワ憲章で提唱したように「人々が自らの健康とその決定要因をコントロールし、改善することができるようにするプロセス」と定義されています。地域での健康づくり活動にとどまらず、健康を阻害する様々な要因を取り除くために、社会や政治に働きかけることも当然その内容に含まれているのです。まさに、私たち医療生協の理念や日々の実践と太く繋がっているということがご理解頂けるでしょう。世界に範を示す取り組みをご一緒に創ろうではありませんか。

「健康フェスタ」にて

虹の投書箱だより

駐車券の処理と割引について

Q ①駐車券の割引処理を防災センターでできるるようにしてほしい。特にこの病院は入り組んでいて、どこでもらえばいいのかわかりづらい。

②同居の家族だけ駐車券の割引証明書を頂けることを知りました。同居ではないのに同居という嘘もつけず困っています。同居でなくても入院患者の所に通っている家族は少なくないと思います。改善をお願いしたいと思います。

今回頂きましたご要望を検討し、駐車券の処理方法と割引の範囲を変更することとなりました。現在は、防災センターで駐車券の割引処理が出来るように変更しました。また、今までお見舞いの方の駐車券割引対象範囲を「同居の家族」までとしておりましたが、同居に限らず「家族」と変更しました。今回の変更で感謝の声を頂いています。

表紙写真：ココロンエクササイズ
埼玉協同病院だより ふれあい 冬号 No.04
発行：医療生協さいたま 埼玉協同病院
〒333-0831　川口市木曽呂1317　Tel.048-296-4771　Fax.048-296-7182　ホームページ：http://www.kyoudou-hp.com